

『辞書引き学習法』

4年前のこと、出勤準備中に「辞書引き学習法」というタイトルに引き付けられテレビに見入った。当時、小学生の間で国語辞書で調べた言葉に付箋をはる「辞書引き学習」という学習法が、大ブームになったことを紹介したものだ。カラフルな付箋がいっぱい付いていて分厚くなり、パッと見たところ辞書に見えない子ども達各々の辞書だった。

この方法を考案したのは京都の立命館小学校の深谷校長先生（当時）だったそうだ。

校長先生曰く。「この学習法は知的好奇心を身に付けるのに役立つ。遊び感覚でやる気を引き出し、やればやるだけ自信にもつながる」と。

確かに、友達の辞書よりいっぱい付箋が貼ってあってパンパンに膨らんでいたら、内心（勝った！）って思うだろうし、ゲーム感覚で楽しんで学べたら吸収とか理解度が大幅に上がりそうと思うのは私だけであるまい。

なぜか？関わってきた小中学校の先生方の国語の時間に、辞書の活用を図っている光景にはあまり出会ってこなかったような気がするからだ。辞書は教室の棚の上に置かれていたので、使っていないということではなかったのだろう。ただ、辞書を片手に調べることを楽しませながら、自学自習の授業をさせてきた私からすると、受身の授業スタイルにはどうにも歯がゆさが残ったのだ。授業者が子どもたちに調べることをさせないまま、語句の説明をしているところに出くわすと尚のことだ。

私は辞書の積極的活用派。3年生、4年生を受け持ったときにはよく辞書で「遊ぶ活動」・「辞書使う活動」を取り入れた。自分で調べることの楽しさ、大切さが身についてほしかった。

何事も面白くなければ長続きしないのが相場である。国語の時間はもちろんだが、意図的に「調べ学習」を取り入れ、面白味がつくまで続けたことを思い出す。自学自習の基礎が備わればしめたものである。学習時間に、家庭での学習にと辞書を活用し学習の幅が広がっていった。

もう一つ、地図帳の活用も日常的に行った。

国語の辞書と同じことであろうが、活用の楽しさが身につけていることが必要と考えた私は、社会の時間の冒頭5分ほどを地図めぐりの時間とした。地図帳を使ったゲームのようなもので、子どもたちは夢中になって取り組んだ。

使う楽しさが分からなければただの地図帳。楽しさが分かれば国語辞典も地図帳も宝物に変わる

であろう。(まだインターネットが普及していなかった時代なので...)

私が辞書を学習に取り入れるようになったきっかけは、若かりし頃、先輩教員の巧みな授業を見せてもらったこと、授業実践の話がたくさん聞かせてもらったことにある。

「オレの授業を見に来い」と、誘ってくれた先輩。酒を酌み交わしながらの授業実践交流に花を咲かせた時代。随分と学ぶ機会があった。というか、今思えば機会を作っては後輩達を育てようとしてきたのではなかったのか。

私が先輩達に学び大切にしてきたことの一つが、子ども達と授業を楽しむということ。そのために授業の中のあちらこちらに“遊び”を取り入れる(何時もというわけにはいかなかったが...)ことで、授業の楽しさや学ぶことの楽しさを共有できたような気がする。

深谷校長先生発案の「辞書引き学習法」の素晴らしさは、“遊び感覚”でやる気を引き出しているということ。遊び感覚でやるからこそ集中が持続する。「面白いから長続きする」ということだ。

校長先生は若い頃から実践経験が豊富な方で、辞書の活用法の他にも自らが考案・実践してきたことは山ほどあるに違いない。その一端を後輩に伝授したということのように思える。

先輩の先生方が持つ高い教育技術をどう後輩が学んでいくか。私が若い頃よく言われた言葉は「オレはお前に教えることはしない。やっていることを盗め!」だった。周りには多くの優れた実践がある。教えてもらうのでなく、自分でつかみ取ってこそ本物の先生になれるという、先輩諸氏からのきつくて温かいメッセージだった。多くの実践に学び、授業技術の引き出しをたくさん増やすことで、子ども達の「やる気」「元気」「根気」を育ててもらいたいものである。